

第20回「ことば」フォーラム

ことばビデオ『方言の旅』
—庄内方言の集い—

2004年5月29日(土)

山形県三川町公民館

佐藤 亮一 (東京女子大学)
佐藤 武夫 (方言研究家)
大西 拓一郎 (国立国語研究所)
富永 一 (『方言の旅』 製作監督)
原田 佳奈 (『方言の旅』 主演俳優)

共催：山形県三川町

後援：山形県教育委員会・鶴岡市教育委員会
三川町教育委員会・NHK 山形放送局

独立行政法人 国立国語研究所

【あいさつ・趣旨説明】

司会（金田 智子）定刻となりましたので、独立行政法人国立国語研究所主催、第20回

「ことば」フォーラムを始めさせていただきます。今回は、ことばビデオ『方言の旅』一庄内方言の集いと題しまして、こちら山形県三川町で開催いたします。この度の「ことば」フォーラムは、山形県三川町の皆さんに全面的に御協力いただき、三川町の方々と国立国語研究所の共催で実施することとなりました。また山形県教育委員会、鶴岡市教育委員会、三川町教育委員会、そしてNHK山形放送局に御後援いただいています。では、まず主催者を代表しまして、国立国語研究所所長の甲斐睦朗より御挨拶を申し上げます。（拍手）

甲斐 この度、三川町で再び「ことば」フォーラムを開催する運びとなりました。実は2年前に「ことば」フォーラムを開催し、そのときに私はこの町の大変豊かな風土それから言葉に対する強い関心、自分たちの言葉に対する自信、そういったものを感じました。それから2年たち、またこうやってお目にかかることを、私も非常にありがたく思っています。とりわけ本日は三川町と共催という形をとっているわけです。私どもの研究所は独立行政法人へ移行し、普及・方法にいろいろ力を入れていますが、その一つに「ことば」シリーズがあります。本日、これは政府刊行物として販売していますが、その中の「ことばの地域差」（新「ことば」シリーズ16）に、こちらの佐藤武夫さんにおいていただき、座談会を開催しました。三川町の言葉について非常に造詣のある発言をしていただいているわけですが、その「ことば」シリーズの出版をきっかけとして、今回の「ことばビデオ」の企画になりました。今日は東京シネビデオの方々もおいでになっており、外でビデオの販売もしています。国立国語研究所は、1年に1回ずつ「ことばビデオ」を作成し、1年に5回「ことば」フォーラムを開催しています。今日これから上映しますビデオは、本当にすがすがしい感じの内容になっています。これは東京女子大学の佐藤亮一先生の力強い協力を得たからだ、私は感謝しているわけです。こうして、本日は阿部誠町長をはじめとして、本当にたくさんの方々の御協力を得て、「ことば」フォーラムを開催できますことを、心から感謝申し上げたいと思っています。まずは皆様に御覧いただき、それからまた後で監督をはじめとして、出演なさった関係者の話も伺って、三川町の言葉に思いを致すと。それから私どもの本心から言うと、これが全国の小学校から中学校の総合的な学習時間の言葉探検の一つのきっかけになってほしいと思っているわけです。今日は三川町に焦点を絞っていきますが、もう一つのねらいは

全国への発信がある。そういうことも、ぜひお考えいただきたいと思っているところです。以上、簡単であります。御挨拶といたします。ありがとうございました。(拍手)

司会 次に、この度御共催いただきました山形県三川町の町長でいらっしゃいます阿部誠様に御挨拶いただきます。お願いいたします。(拍手)

阿部 ここ庄内平野も春の田植え作業が順調に進み、早苗も大きく成長しています。緑も一段と鮮やかになりました。今日はあいにくの雨ですが、この雨も生命のこれからの生育あるいは成長には大きな潤いとなることで、大変な季節の恩恵を受けているのかなと感じているところです。本日、第20回「ことば」フォーラムを、私は「庄内の中心都市」といつも言っているわけですが、この三川町で、このように大勢の皆様にご出席いただき、開催していただくことを心から感謝と歓迎を申し上げたいと思います。国立国語研究所さんからは、本町の方言、言葉の文化を様々な機会にとらえていただきながら、方言の魅力を、町民もそうですが、全国にも方言の温かさ、そして地域の文化としての役割を大きく広めていただいているのではないかという思いでもあります。これといった観光資源の少ない三川町にとり、今日、一緒に参加します佐藤武夫と、現在は町会議員ですが、若い世代の方々が言葉を地域の文化にした地域興しをやろうと取り組んで以来、「全国方言大会」の開催、大学での方言あるいは言葉のゼミ（研究会）など、いろいろ本町の住民や若い世代の方々が様々な面をつながりを持たせていただき、50年に1回あるかないかという大会を、このようにたった3年の間に2回も開催していただけることは、誠にありがたいなと思っています。今、三川町においては言葉の温かさを地域の文化として、平成12年、町の中心にあります、なの花温泉「田田」を中心としたいろり火の里、ここには「田田の宿」という宿泊施設がありますが、この中に方言ライブラリーを設立、スペースはそんなに広くありませんが、町としても方言の魅力を、これからはここから情報発信を全国的にやっていきたい。この気持ちの表れが、今日御出席いただいている佐藤亮一先生とか諸先生方、ゼミの方々の御協力により、全国の中においても、方言の町三川を理解していただく大きなチャンスとしてとらえているところです。今日御出席の皆様方とともに、ことばビデオ『方言の旅』が、より全国の教育現場で理解していただけるような「ことば」フォーラムとなりますように、この地域の大切な文化を再認識することで、この会が大盛況に進まれることを御期待申し上げ、歓迎とお祝いの御挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。(拍手)

司会 ありがとうございます。すでにお気づきかと思いますが、本日は手話通訳をお願いしています。山形県身体障害者福祉協会を通じ、秋庭さん、小林さん、佐藤さんに、この2時間、通訳していただくことになりました。どうぞよろしく願いいたします。

(拍手) 申し遅れましたが、本日の司会を務めさせていただきます国立国語研究所の金田智子と申します。よろしく願いいたします。(拍手) さて、今日はお手元のプログラムにありますように、前半、後半と分かれています。前半は、当研究所が作成しました「ことば」ビデオシリーズ3『方言の旅』を上映します。後半は、このビデオそれから庄内方言に関して、5名の方をお迎えして座談会をお送りする予定です。ここで少しビデオについて御紹介します。これから御覧いただく『方言の旅』は、こちら三川町を主な舞台とし、三川町の皆さん、例えば三川中学校の方、地元の多くの方々に御出演・御協力いただきました。一口に日本語と申しましても、全国には様々な方言が存在しています。その中で、当作品では庄内方言を中心に取り上げました。実際に使われている状況、方言に関する様々な研究資料を御紹介しながら、日本の方言について考える内容となっています。多くの学校や地域の生涯教育の関係の方々に広く御活用いただければと願っていますが、このビデオを御紹介する場として、この度まずロケ地となりました、こちら三川町に来させていただきました。ビデオ上映の後、このビデオに関してビデオ制作に深くかかわった5名による座談会がございます。皆様にとっては非常に身近な庄内方言ではあると思いますが、これをまた別な視点から見直し、日本の方言についての理解を深める場となれば幸いです。途中、2時間、休憩を入れずに進めさせていただきます。御了承ください。

【第一部】 ことばビデオ『方言の旅』 (配布資料：p. 1～10)

<ビデオ上映>

司会 では、「ことば」ビデオ『方言の旅』の上映です。(拍手)

<ビデオ終了>

いかがでしたか。今、約1時間、52分のビデオを御覧いただきました。本来ですと、ここで皆様から御意見・御感想をお伺いしたいところですが、時間の都合上、次のプログラムに移らせていただきます。

【第二部】 座談会『方言の旅』を巡って

司会 では、次の座談会の登壇者の方々、前のほうに御着席ください。皆様からの御意見・御感想を、私どもはぜひ伺いしたいと思っています。受付でお配りした資料の中にピンク色のアンケート用紙があります。そちらにぜひ御意見・御感想をお書きいただければと思います。筆記用具の必要な方はスタッフにお申し付けください。お持ちいたします。ただ今御覧いただいたビデオを含め、「ことば」ビデオシリーズ第1巻から第3巻までは、本日ロビーのほうで販売しています。これは本日に限り、2割引となっています。また国立国語研究所では、先ほど所長の話にもありましたように、「新ことば」シリーズを出版しています。例えば、このシリーズの16巻では、本日のテーマであります方言を扱っています。今日のビデオを御覧いただく際に、ぜひ参考にさせていただければと思います。また今まで出版されました「ことば」シリーズ、国立国語研究所の刊行物を含め、政府刊行物もロビーで販売しています。本日のプログラム終了後、4時まで販売していますので、どうぞぜひこの機会に御利用ください。では、座談会の準備もできましたので、そちらに移ります。ここで進行役を当研究所の大西拓一郎にバトンタッチします。よろしくをお願いします。

大西 国立国語研究所の大西と申します。よろしくをお願いします。(拍手)これから座談会が始まりますが、最初はこの3人でしばらく話をしたいと思います。皆さん、御存じかと思いますが、簡単に御紹介申し上げます。私から遠いところになりますが、佐藤武夫さんです。(拍手)三川町では町会議員として非常によく知られていますが、方言の研究の世界では『みかわの方言』という本をまとめられたことで、それからまた全国方言大会を開催され、最初に非常に御尽力されたことでもよく知られています。それから私の隣におられますのが、佐藤亮一先生です。(拍手)東京女子大学の先生で、私ども研究所の先輩でもありますが、全国の方言についても様々な研究をされていますし、三川町ではもう10年ぐらいになりましょうか、もっとなりますか、15年になりましょうか、三川町の方言についていろいろ調査されていることで、皆さんもよく御存じの亮一先生です。座らせていただきます。お二人は、もちろん武夫さんは御当地三川町の御出身、亮一先生は山形県の出身と言っているのでしょうか、高校は山形でお過ごしで、お二人とも山形に非常にゆかりの深い方です。私は全国の方言を研究していますが、出身は奈良県で、ここ山形とは縁はありますが生まれは違います。ただ、やはり10年ぐらい前に隣の鶴岡で調査をしております方言の知識は得ていますが、いまだに分からないことだらけというような状態です。さて、ちょっとスライドを使いながら、復習などをしてみたいと

思います。先ほどのビデオになりますが、このビデオでは最初から「サ」がテーマになっていました。「サ」ですが、どんなふう nationwide に分布しているかは、まず「東のほうへ行け」で見ますと、赤い記号が「サ」ですが、東北地方に非常に広く分布している様子が御覧になれるかと思えます。ただ一方このビデオにもありましたが、九州にも分布が見られるということです。この「サ」は東北に広く見られ、「東のほうへ行け」は非常に広いのですが、「見に行った」になると、ちょっと狭まるのです。主に太平洋側に分布が見られることが分かっています。それから「ここにある」の「に」にあたる「サ」だと、グッとまた分布が変わり、主に日本海側に分布している様子が御覧になれるかと思えます。資料 p3の「大工になった」、ビデオでは「先生になった」だったのですが、ほぼ同じかと思われそうですが、これは分布が非常にまばらになります。庄内地方はどうなっているかという、「に」にあたる場所に何も使わないです。何もない。つまり「大工なった」、「先生なった」ということが分かっているわけです。ところで、ここで皆さんのお手元に色刷りのプリントが配布されていたかと思えます。いろいろなプリントが配布されていて、どれだかよく分からない方もいらっしゃるかもしれませんが、そちらに「先生になった」を皆さんはどういうふうにおっしゃいますかということが挙げられています。探していると大変ですので、もし見つからなかったら、いいです。ちょっとお伺いしたいのですが、「先生になる」をどのように言うか、ここで手を上げていただきたいのです。まず「先生サなる」という方、どれぐらいいらっしゃるでしょうか。「先生サなる」と「サ」を入れますという方、手を上げてください。はい。今ザッと見ますと後ろのほうに何人かまとまって分布が、これを分布というのかよく分かりませんが、拝見できます。顔を拝見しますと、若い世代の方かなということが見えるのです。一方「先生なる」、そこに何も入れませんという方はどれぐらいいらっしゃいますか。「先生なる」、そうです「先生なる」、こちらのほうに分布が片寄っていますが。先ほどの「先生サなる」に比べると、やはりちょっと世代が上になってくることが分かります。じゃあ「先生になる」はどうでしょうか。これは多いんですね。意外に「に」が多いことも分かりました。はい。どうも伝統的な方言では「先生なる」だったらいい。それが「先生サなる」となっているらしいことが見えてくるのですが、それは分布でもある程度分かります。もともと庄内には、ほとんど「先生サなる」という言い方がなかった。ところが中学生では「先生サなる」という言い方がかなり一般化している、広く使われているようです。変化の方向としては、通常は「サ」という言い方は、むしろ減っていくほ

うが一般だと考えられます。なぜかという、これは共通語の影響を受けて、「サ」なんていう方言の形を使わなくなる。こちらのほうが一般的な方向と思われがちですが、むしろ「サ」は用法を拡大する形で、もともと中学生では使わなかったところに「サ」を使うようになってきている。つまり共通語化とは反対の方向をしていることが見えてくるのです。こういうふうに用法を拡大していくのは、言語の一般的な変化の中で我々がビデオを作る段階では共通語化ということしか取り上げられないかなと思っていたのですが、「サ」が拡大、用法を広げていることは、ある意味ちょっと発見であったし、全国の人に見てもらうにあたって、一般的な言語の変化をビデオの中で示すことができ、ある意味ちょっと成功して、全国の方が見ても、なるほどと思われるような方法を示すことができたのじゃないかと思って、その辺は良かったなと自分では評価しているところです。ところで庄内方言の中でいろいろな変化が起こっていることに関しては、先ほど申し上げましたように、亮一先生のほうで15年ぐらい前から、かなり多くの人にあって調査をされているようです。その辺について、亮一先生からお話を伺いたいと思います。

佐藤(亮一) 私は15年ぐらい前から学生と一緒に三川町にお邪魔し、様々な調査をさせていただいていますが、今日はその中で庄内地方で使われている方言、三川町で使われている方言が、どのくらい残っているのかということについて調査した結果を二つ御覧いただきたいと思います。一つは、先ほどのビデオに出てきました『日本語地図』で調査された言葉が、どのくらい残っているかという『日本語地図』の追跡調査です。『日本語地図』は昭和32年から39年にかけて調査しました。調査対象者は明治36年（1903年）以前に生まれた方々です。つまり今御存命でいらっしゃれば一番お若い方で101歳、そういう方を調査しているわけです。全国2,400箇所まで調査していますが、三川町でも1箇所だけ調査しており、三川町神花という集落の上野農夫雄さん、明治35年（1902年）生まれ、お元気であれば101歳になられる方を調査しています。上野さんの調査をした方は柴田武先生という元国語研究所におられ、今は東大の名誉教授でいらっしゃいますが、非常に有名な方言研究者です。つまり、『日本語地図』に載っている言葉は、明治・大正時代に日本で使われていた古い言葉です。明治・大正時代に使われていた方言がどのくらい残っているか、これを私たちは1999年に三川町の61名の方々を対象に調査しました。その結論は、残っている方言と消えかけている方言があるということです。棒グラフが四つありますが、左が若年層のお若い方、左から2番目が中年層、左から3

番目がお年寄りの60歳以上の方、一番右側は全体の平均です。年齢が幾つと尋ねるときのことを「なんぼ」と言う、くすぐったいことを「こちょびて」と言う、とうもろこしを「きび」と言う、昨日のことを「きんな」と言う、今晚のことを「ばんげ」と言う、捨てることを「うだる」と言うなど、これらの方言は若い方を含めて90%以上の方々が、今でも使っています。また、女性のことを「おなご」と言う、お金を「ぜん」とか「ぜに」と言う、糠^{ぬか}のことを「こぬか」と言う、驚くことを「おぼげる」と言う、これらの方言も三川町のかなりの方が今でも使っていちゃいます。一方、ほとんど消えかけている方言もあります。例えばカマキリの「いぼぼっち」はお年寄りの方でも10人に一人しか使っておらず、中年層・若年層はこの言葉を知りません。昔は親指を「おゆび」と言っていました。これは大指の変化ですが、「おゆび」を今でも使うのは61名のうち、お年寄りの1名か2名です。中年の方や若年層ではゼロです。このように方言は共通語化するばかりではないことが分かります。その次の調査を見ていただきたいのですが、佐藤武夫さんが昭和58年にお書きになった『みかわの方言』です。これは三川町で使われている言葉、武夫さんが集められた方言が載っているわけですが、この方言が今どのくらい残っているのかということ进行调查しました。若い方からお年寄りまで60数名の方々が対象です。「うだる」、「ごしゃぐ」、「たがぐ」、「かだがる」、「ぼっこす」は、皆さん、もちろんお分かりですね。お若い方でも95%、つまりほとんどの方が今でも使っている。その次の「いだまし」、「みじょげね」、「はばげる」、「こちょばで」、「うるがす」は、若い方でも8割以上が使っています。「うるがす」については後でまた御説明します。ところが、やはり消えかかっている方言もあります。「だだくちゃね」、「でだう」、「はんちける」、「かんばらこ」、「あべる」、「うしきたま」などです。「うしきたま」は、「今年はトマトがうしきたまとれた」のように使うのだらうと思いますが、お年寄りの方は62%使いますが、お若い方は16%しか使いません。皆さん「ぎしゃばる」は分かりますか。

大西 すみません、「ぎしゃばる」ってどういう意味ですか。

佐藤(亮一) ちょっと言いにくいですね。「トイレの中でぎしゃばった(笑)」と言うので、「踏ん張る」という意味だと思えますが。その次の「くすぐる」は、これは「こちょばす」ことではありません。三川町の「くすぐる」は、ズボンのほころびをくすぐる。繕う、直すという意味です。お年寄りの方は83%が使っていちゃいます。お若い方はゼロです。中年の方もほとんどダメです。「うしきたま」「ぎっしゃばる」「ズボンをくす

ぐる」のような方言はまもなく三川町ではなくなるでしょう。しかし先ほど申しましたように、「きんな」「うだる」「おなご」「おぼげる」のように、まだまだ残る方言もあるわけです。若い人が今でも使っている方言はおそらく50年後、もしかすると100年後にも残るではないかというのが私の予想です。以上が今日の冒頭のお話です。

大西 はい、どうもありがとうございます。今、「田田」に我々は泊まっているのですが、お風呂にはいると壁にいくつも方言が書かれているのですが、いつも何なのかよく分からないのです。考えているうちに、のぼせてくるものですから(笑)、分からないままに。上がったら調べようという気持ちがどこかにいってしまって、いつも入る度に調べようと思いながら、本当に情けないのですが。その辺はまた武夫さんに教えていただきたいのですが。庄内方言の中で今こういう変化が起こっているということで、全国から見たときの地図の分布とか、実際に調査なさった結果を亮一先生から教えていただきました。こういうふう実際に変化している中に暮らしておられる武夫さんとしては、どんな実感をお持ちになるのでしょうか。ちょっとその辺を教えていただきたいのですが。

佐藤(武夫) 今、亮一先生が言ったような、前は使っていたものが、今はだんだん使わなくなってきたのは、生活様式が変わったりすれば、当然いらなくなる言葉や、前は使わないが逆に必要になる言葉だってあるわけです。例えば田植え・稲刈りが手作業時代、機械化にならないときは全部手でやった、そのときにいろいろな言葉がいっぱいあったわけです。それが今度、機械化になると、手を使っているときの方言は、だんだん使われなくなるわけです。

佐藤(亮一) 「ぎしゃばる」というのも、トイレの様式が変わったから使われなくなったのですか。

佐藤(武夫) 結局、分かりやすくいえば、そういうこともあるわけです。洋式になれば、あまり踏ん張らなくてもいいというか。それから稲刈りも手刈りだと田んぼの角まで全部刈るわけですが、コンバインの時代になると角まで機械が行けないから端っこから、この辺では「し(す)まこがり(刈り)」と言うのですが、手刈りの頃は「しまこがり」という言葉は必要なかった。機械化になったため、今度は「明日おらんち稲刈りするさけ、しまこ刈り今日のうちしておけ」とか言う。生活様式が変わってくれば当然いらなくなる言葉もあれば、必要な言葉もあるということです。今の生活に関係あるような言葉は今でも使われているということです。

佐藤(亮一) 「かたつむり」、「とかげ」、「おたまじゃくし」とか、そういう方言もなくな

りつつありますが、昔は子供たちが小さい動物と遊んだのです。だから、そういう方言を使っていたわけですが、最近はテレビゲームなどをしてほとんど虫と遊ばなくなった。そういうことが背景にあるのではないかと私は思っています。

大西 「くすぐる」なんていうのもそうですか。だんだん服を繕うなんてしないで、古くなったら捨ててしまう。

佐藤(武夫) ああ、そうかもしれませんね、はい。

大西 共通語でも「繕う」という言葉が、だんだん使われなくなっていくこともあるかもしれないですね。そんなふう実感を持っておられるわけですが、そもそもどうでしょうか、一方で使われなくなるのは生活の実態に当然関係することもあるが、同時にやはり共通語の力を強く受けることもあるかと思いますが。武夫さん、その辺は三川町でどんな実感をお持ちですか。

佐藤(武夫) 今の子供たちは、朝起きるとすぐテレビをつければ東京の言葉が出てくる。それから交通の便も、高速交通網になればなるほど、言葉の差がだんだんなくなる。子供たちは学校の授業とか、そういうところで、まず方言があまり必要でなくなる。ところが社会人になると必ずそれは、この地域の環境にピッタリ合った言葉は絶対使わなければ生活できないから、方言は絶対なくなるならない。例えば海辺の人なら、漁師などは「さかな」、「ふね」、「なみ」、「あみ」とか、今そういうものに関係ある言葉が必要なわけです。魚を獲りに行って、いっぱい獲れた。急いで市場に持っていかなければならないときは、方言でパッパッパッとしゃべって伝わるわけです。海言葉は山奥では必要ない。山奥なら山に関係ある言葉、「山菜」、「熊」、「猿」、「キジ」とか、そういうものに関係ある言葉が、その地域のピッタリ合った、環境に合った言葉が、その地域の生活語だから、使わなくなる言葉がある一方で、絶対必要な言葉が必ずあるわけです。例えば、この辺では農家の人はみんな「だだちゃ豆」などを多く作っているわけですが、仮に「だだちゃ豆」じゃなくても「豆をうるがしておけ」と言えば、バケツに水を入れて豆がふっくらになるような状態、それを標準語でしゃべっていけば、「バケツに水を入れて、豆をこの袋から開けて」、ずっと長くしゃべっていなければいけないが、「その豆をうるがしえ」と言えば分かるわけです。そういう現在でも生活に関係ある言葉は、なくならないと思います。

佐藤(亮一) 東北地方では「うるがす」を方言とっていない人が多いと思います。大事なことは、「うるがす」とか「やばつい」、そういう言葉は共通語にはないニュアンスを

持っており、どうしても共通語に訳せないのです。「やばつい」、「うるがす」にあたる共通語は、実はないのです。だから方言を使わざるを得ない。使わなければ生活できないということがあるわけです。

大西 非常に気持ちを表すと言いますか、感情的なものを表現するのにピッタリしたものが存在していたら、それでないと表現できないとなったら他に置き換えられないので、それが残ることは当然ありそうな気持ちもするのですが。ここで、ちょっと話の方向を変えて、今、庄内の中で起こっている変化という話をしたのですが、今度は庄内というところが全国から見たときに、それから山形の中で見たとき、また東北の中で見たときに、どういうふうに位置付けられるのかということで、その辺の話に移りたいと思います。またこれも復習になるのですが、先ほどのビデオでも「つらら」について扱っていました。「つらら」の中でいいますと、この辺はそうですが、東北地方には「たるひ」の類が広く見られるわけです。それは同時に、「たるひ」のよく似た形は九州地方にも、この辺とこの辺に分布していることが知られている。これはビデオの中でもあった「圏分布」という言い方でいわれているもので、古く長く日本全体の中心であった京都で使われていたものが、だんだん東と西の両方に広がっていくわけです。広がっていったものが、当然、京都でも変化を起こすから、また新しい形が生まれて広がっていくが、かなり古い段階で使われていた「たるひ」が東北地方と九州に現時点で残っている。それが分布の上で表れている。こういう意味合いが、東北地方を見たときに一つ性質として見るができるわけです。つまり中央の京都でのかなり古い言葉が地方に残っていることが言えるわけです。ところが同時に、その反対もあり、この庄内もそうだと思いますが、見ろという命令の形を「みれ」、起きろというのを「おきれ」、本当は有声化して「おぎれ」という感じになるのだと思いますが、かなりの方が、若い方でも使うのじゃないでしょうか。「みれ」、「おきれ」を使う方は、どれぐらいいらっしゃいますか。ちょっと手を上げていただけますか。ほとんど全員のようなですね。ですので使っていることが実感されるわけです。これは東北地方でも特に日本海側に広く分布しています。でも、これは東北地方にもありますが、また実は九州にもあるのです。だからといって京都の古い形を反映しているとはいえないです。さっきも「ラ行五段化」という我々の世界の専門用語を使ってしまったのですが、そういうことで説明ができる。もともと「見ろ」があって、これが自然な変化の中で「みれ」になるという、言語の変化の法則の中で説明できるものです。そういうことでいうと、中央は「見ろ」のままでとどまってい

た。地方は自然な変化を両方で起こすから、新しい形が東北地方のほうで見ることができるといえるわけです。ということは、つまり東北地方は非常に古い形もある一方で非常に新しい、それが本当にあたるかどうか分かりませんが、恐らくいずれ共通語が「みれ」になる可能性は否定できないと思います。これはどれぐらいの時間がかかるか分かりませんが、自然の変化に任せておけば、「みれ」になることは十分考えられます。関連して、「見れる」とか「起きれる」は「ら抜き言葉」といって、中央では「それは間違った言い方だ」としばしば言われるのですが、かなり若い世代は「見れる」、「起きれる」に変化しています。これと同じようなことが、もうすでに東北地方ではかなり早い段階で起こっているわけです。つまり中央でいずれ起こる変化は、もうすでに東北地方では起こっていることが考えられます。まとめますと、東北地方は古いものと新しいものを両方持っているのです。いわば言語のタイムマシーンといえますか、我々研究者の側からすると、いろいろなことが見られるわけです。非常に古いものも発掘できるし、将来こういうふうに変化するだろうという予測まで、ここでデータが得られるという、その二重の性格を持っている、非常に面白いフィールドだと思いますが。さて、そんなふうにならば全国から見たときに、東北方言を位置付けることができるかと思いますが、東北方言の中で庄内を見たときに、どういうふうに位置付けられるのでしょうか。その辺を亮一先生のほうにお願いしたいのですが。

佐藤(亮一) 東北方言は大きく分けると、日本海側を中心とする青森、秋田、そして山形県の庄内地方から新潟県北部にかけての「北奥方言」と、岩手県の南のほうや山形県の内陸部、宮城県、福島県などの「南奥方言」とに大きく分かれるわけです。山形県は、庄内は北奥方言圏に属し、内陸は南奥方言圏に属するため、山形県は庄内と内陸で対立する言葉が非常に多いのです。これがまず第1の特色です。例えば「今日は雨が降っているけれども」というのを、こちらでは「雨降ってるども」、「ドモ」はだいたい北奥方言圏、内陸は「ケンドモ」を使います。それからアクセントは、例えば、なめる「飴」と降る「雨」です。これは東京では「アメ(雨)」、「アメ飴」と区別するわけです。庄内では、「アメナメデー」を平らに言い、「アメフツテキタ」とメを高く言う。こういう区別は内陸は全くありません。仙台もありません、宮城県もありません、福島県もありません。つまりアクセントの区別があるのは北奥方言、山形県は庄内だけです。こういうふうに庄内と内陸、つまり南奥方言と北奥方言が大きく異なる。それから、もう一つ申し上げておきたいのは、庄内で使っている方言は、庄内地方以外の広い地域、東北方

言全体とか場合によっては東北地方と関東地方、あるいは東日本の全部とか、かなり広い地域で使っているものが多く、庄内地方だけで使っている方言はほとんどないのです。主に庄内地方だけで使われている方言の例を挙げると、先ほど出てきた「捨てる」ことを「ウダル」というのは全国で山形県の庄内だけです。東北地方はほとんど「ナゲル」です。どうして庄内で「ウダル」というか。関東地方は「ウッチャル」ですが、これは「ウチャル」の変化です。「ウチャル」を昔は「ウティヤル」と発音していて、それが「ウダル」と変化したのではないかと思います。つまり「ウダル」は庄内ですが、実は関東方言の「ウチャル」、「ウッチャル」の流れを汲むものではないかと私は思っています。それから「まぶしい」ことを「カガポシイ」、最近は使わなくなっていますが、これも日本中で、多分、庄内だけです。内陸は「マツポイ」です。もう一つ例を挙げれば、「今日は雨降ってっさげ、雨降ってっはげ、学校さ行がいねえ」という、「サゲ」「ハゲ」は庄内だけであり、関西弁の「サカイ」、「雨降りよるさかい」の「サカイ」が「サケ」、「サゲ」「ハゲ」と変化したものです。大阪弁の「サカイ」は江戸時代に生まれたと言われていますが、それが北前船によって庄内地方に運ばれ、「サゲ」と発音が変化して、庄内で使われていると考えられます。このように庄内地方だけで使われている方言もないわけではありませんが、庄内地方で使われている多くの方言は他の広い地域でも使われています。最後に私たちが気づかずに使っている方言、方言とっていないが実は方言だったという例を挙げたいと思います。私は山形の内陸出身ですが、私もずっと方言だと思っていなかったのに、あるとき、方言だと分かったものがあります。例えば先ほどビデオに出てきた「犬ガラ追いかけられる」は、私は標準語だと思っていたのです。ある日、原稿に「犬から追いかけられた」と書いたら、「佐藤君、山形では犬から追いかけられたと言うんですか」と言われ、「えっ、それって標準語じゃないんですか」と問い返したら、「東京では言いませんよ。東京では犬に追いかけられたです」と言われて、ビックリしました。私の妻は仙台出身ですが、私も妻も「お米を水にウルカス」の「ウルカス」は標準語だと思っていたのです。皆さんはどうですか。東京では「ウルカス」とは言いません。国語辞典にも載っていません。つまり「ウルカス」は方言です。だけど、これは標準語で何て言えばいいんですかね、非常に困ります。それから、もう一つ庄内で気づかずに使っている方言の例を紹介します。私は15年前に三川町に来て、そのとき、三川町のあるお年寄りの方から教えていただいたのですが、三川町出身で東京で看護婦をしていらっしゃった方がおり、手術をして口がきけない患者さんがベッド

の中で暴れるので、「だまっていなさい、だまっていなさい」と何回も言ったそうです。そしたら、その患者さんが後で治ってから、「看護婦さん、私が口がきけないと分かっているのに、どうして黙っていなさいと言ったんですか」と言われたそうです。庄内では「ダメッテレ」は、動くな、じっとしているという意味でしょう。だから看護婦さんは、「じっとしていなさい」という意味で「だまっていなさい」と言って、誤解されたのです。こういう例は沢山あります。私は、こういう気づかずに使う方言は大変面白いと思っています。

大西 「カラ」は案外、方言であることに気がつかないという話があり、地図にもあったわけですが、皆さんに聞いてみましょうか。「犬カラ追いかけられた」と、ごく普通に使う方はどれくらいいらっしゃいますでしょうか。これもかなりの数にのぼる。

佐藤(亮一) 「犬カラ追いかけられた」を方言だと感じている人？ 一人もいません。あっ、一人いました。一人だけ知っていましたが、後で勉強なさったんじゃないですか(笑)。

大西 後で知ったということのようですね。

佐藤(亮一) じゃあ「ウルカス」を方言だと思っていられる方？ これも数人だけです。

大西 ということで「ウルカス」、「犬カラ追いかけられた」は、将来これから残っていくものではないかと予測されますが。さて、今、庄内を東北の中で位置付けたときということで一応お話ししていただいたのですが、私のような元々のよそ者から見ると、何か山形方言は有名ですが、その中に違いがあることに、あまり気がつかなくなったりするのです。どうでしょうか、武夫さん、内陸と沿岸で違いがあることについて、何か実感される部分はありますか。

佐藤(武夫) まず山形の内陸の言葉と庄内とは違います。昔、伴淳三郎がしゃべっていた言葉が内陸弁と思えば、「ズウズウダベ」とアクセントが激しい。庄内弁はアクセントが割と平らで、語尾に「何々だノウ」とか「チャ」がつけば庄内弁です。だから庄内の人は、例えば庄内から津軽に行った、庄内から九州に行った、庄内から大阪に行った人は、アクセントが平らなため、すぐそちの土地の言葉を簡単にしゃべることができる。帰ってきたら庄内弁もしゃべれる。ところが内陸の人だと、どこに行っても「ンダ、ズウ」のアクセントが残って、山形からこっちに20年ぐらい住んでいても、必ずどこかにアクセントが残って、庄内はアクセントが割と平らなところかな。あと東京なら最初の音にアクセントがありますが、庄内は2番目の音にアクセントがあるわけです。例えば

「トマト」,「カラス」は、おらほうは「トマト」,「カラス」で二つ目にアクセントがある。「ネコ」は「ネコ」と二つ目に。あとは割と平らです。だから庄内の言葉は、よその人がすぐマスターできる言葉です。こういう平坦な、こういう環境の中の言葉、アクセント、だから人間も割と気持ちの穏やかな人が多い。反面、だまされやすい人も多かなと思います(笑)。それから庄内人はもともと口下手だったから、心を込めて相手に言う、それに「ン」が多く入る。まず「ンダ」,「ンデネエ」,「ンメエ」,「ンマクネエ」とか、そういう「ン」から始まったり、中に「ン」を入れるのは心を相手に伝えるため。例えば、ぶどう、どじょうなどは、「おらのブンドウ」,「今日はドンジョウいっぺしめだ(いっばいつかまえた)」とか、中に「ン」を入れる。それから「寒い」も、「昨日だばサンブなけど、やや今日のほうがサンブイゼ」と「ン」を心を込めて言えば、今日は寒かったのかということも分かる(笑)。というような感じでアクセントは平ら、それから心を込めて言う。さっきのビデオにもあったように、「右さ、まがんな、左さ、まがんな」と、どっちに行ったらよいかよそ者には分からないような表現もある(笑)。それから何か御馳走ちそうになったら、「もっと食べれ、飲め」と言われたとき、「マンズイデ、マンズイデ(もう良いです)」と「ン」に力を入れると、「マズイ」に聞こえてしまう(笑)。そういうところが特徴かなという感じがします。

大西 ですから同じ山形でも、内陸のほうは「ベエ」というが、庄内は「ベエ」はほとんど使わないのです。東北地方というとなんか「ベエ」というイメージがあるが、庄内ではほとんど使わない。監督も最初は「ベエ」をとっていた。東北地方だということが頭にあったみたいで、地元の人に「ベエ」と話しかけるが、庄内は「ベエ」は使わないということがわかった。撮影中、そんな話をしたことがあったかと思うのですが。

司会 ちょうど今、ビデオ制作に携わりました監督の話になったところで、ここで監督の富永一さん、主演をしてくださいました原田佳奈さんに、御登壇いただきたいと思えます。よろしくお願いします。(拍手)

大西 皆さんから向かって右端ですが、今回のビデオ作品の監督をされました富永一さんです。(拍手) 我々の研究所で作っているビデオは、これが3本目になるのですが、1本目、2本目、この3本目とずっと監督をしていただきました。その他にも文化庁関係の『ことば探検・ことば発見』のビデオも作っておられます。それから手前になります、原田佳奈さんです。主演なされた、橘美子たちばなさんですね。(拍手) 原田さんは、ビデオの中では佐藤亮一先生のゼミの学生さんという役柄でした。あれは本当です。本当に

去年まで東京女子大学の学生さんで、佐藤先生のゼミ生です。ですから、あのビデオの内容は半分本当で、半分うそといったら叱られるかもしれませんが、半分はノンフィクションであることになります。その他にも彼女はコマーシャルにも何本か出ておられたり、いくつかドラマ関係でも出演なさっているようです。その二人に作品づくりの思い出とか、こんな点で苦労したということについて聞いてみたいと思いますが。まず監督、今回、多分、東北でこういう作品を作られたのは初めてじゃなかったかと思いますが、感想はどうだったですか。

富永 感想ですか。皆さん、久しぶりにまいりましたが、こういうビデオは日本でもあまりないんじゃないでしょうか。ドラマ的であり、ドキュメンタリー的であり、方言を的確に表現して、第2話ではちゃんとフォローしているという、教育的ビデオとして初めてじゃないかと思います。もちろん我々の中には方言がいろいろ潜んでいますが、私の生まれは東京の日本橋というところで、東北、特に山形に来たのは全く初めてです。先ほど大西さんもおっしゃっていましたが、最初みんな「ベエ」で言っていたら、皆さん、非常に不愉快な顔をされ、申し訳ないと思いました。とにかく、このビデオはドキュメンタリー的要素があり、台本もちゃんとあったという奇妙なビデオで、シナリオを制作する委員会があり、その委員会で美子や相手の台詞を書いているのですが、1冊の台本にはなっているのですが、こちらに来てみると、どう台詞が変化するか分からない。つまり方言を話していただかないと話にならないということで、今日はビデオで最初にバス停を尋ねるシーンがありましたが、あれがまさにクランクインというか、撮影の最初だったのです。前田さんという方なのですが、最初、我々に分かりやすいように方言を使わないで話していただいたので、それじゃあ何もならないでしょうということで、いくつかテイクを撮って、だんだん方言が分からなくなって、分からないところが監督としてのOKという話でした。もう一つ、いろいろ撮影の素材はありましたが、分からない方言を大西拓一郎先生とか武夫さんに聞いて、OKをいただいて撮影は終了したわけですが、今度、編集が大変でした。つまり目的はあります、話のテーマはありますが、私は何を話されているのか分からない。ということで佐藤武夫さんにかなり通訳というか、していただいて、ビデオの目的を達成したような次第でした。とにかく不思議な世界に入り込みましたが、今、ビデオを観てみると、かなり面白かった(笑)。ということです。

大西 私も上映会に参加したのですが、この作品を観て笑い声が起きていることに関し

て、非常に嬉しかったですね。ここで笑いが出てくる作品になっていたのは、まさに監督の力のおかげだと思いますが、同時に出演していただいた方が非常に自然な形で話をしてくださった。その賜物じゃないかと思います。原田さん、今回、恐らくこういう作品は初めてじゃなかったかと思いますが。

原田 そうです。

大西 どちらかというと、もっとソフィスティケートというのか分かりませんが、こんな土っぽい作品には出たくなかったのじゃないかと思うのですが。今回、出てみて、どんな感想を持たれましたか。その前から彼女は佐藤ゼミですから、庄内のほうには、三川町にも来ていたかと思うのですが。

原田 そうですね。この撮影をしたのが去年の10月ぐらいだったのですが、そのちょうど1年前の夏にゼミ合宿でここ三川町に来ていたので、何だかすごく懐かしくて。そのときにお会いした人とかとまた再会することができたり、撮影は本当に楽しかったのですが、ちょうど卒業論文を書いているときで、私は何度となく「サ」の用法の変化というテーマにすれば良かったなと思っていました(笑)。そうですね、すごく楽しかったです。

大西 1週間で分かるようになりましたか。

原田 いや、だから最初のバス停を聞くシーンなどは、あれは本当にリアルなリアクションというか、何をおっしゃっているのか本当に分からなくて。だからドキュメンタリータッチというか、そういう生の感じが出ていたのじゃないかなと思います。

富永 カメラは1台で撮らずに2台を使って、生の雰囲気を出し出すことをしましたので、かなり効果的になっていると思います。拓一郎先生は「カンヌ映画祭に出してくれる」とおっしゃっていたのですが、カンヌは締め切っちゃいましたので(笑)、これから文部科学省の教育映画祭に出品する予定になっています。

大西 ありがとうございます。先ほど上映会で観ていると、橘美子こと原田佳奈さんが首を傾げるシーンが何回もあったのですが、その度に御覧になっている皆さんから喜びの歓声が上がっている。どういう意味なのかと、ちょっと不思議に思いながら観ていたのですが、やはり自分たちの言葉だということを非常に強く認識されたのかなと思いました。今回こういうふうな上映会ができたのは、皆さんに御覧いただきかったところもありますが、我々のためにもなったことを感じました。今回のこのビデオの作品とは別に『新「ことば」シリーズ』という本を研究所から出していますが、この中を御覧いただくと、今回のビデオに関連した内容がたくさん出ています。ですから今日ビデオを御

覧になって、これについてももう少しいろいろお知りになりたいことがあったら、今日はそこで販売もしているようですので、483円だそうです。研究所の本はだいたい高いのですが、100円台で買えるのはこの本だけだと思いますが、ぜひお買い求めになっていただくと、さらにいろいろお分かりになることもあるかと思います。監督、原田さん、さらに何か付け加えて、せっかくの機会ですから、皆さんに話したいことがあったら。

富永 そうですね。本当に地元の方、このキャスティングもすべて武夫さんに委ね、それもかなり大変なことをお願いしました。今日は五十嵐さんがいらっしゃっていただいています。五十嵐さんのお家はすべての家族に出ています。皆さん、顔はお知りだと思いますが、本当に助かりましたし、自然なものが撮れたと思います。また、もう一度観たい方が多分いらっしゃると思いますので、本日の受付で2割引で売っていますので、ぜひお買い求めいただきたいと思います。よろしくをお願いします。

大西 もちろん三川町図書館にもありますので、また御覧になることも可能かと思います。今回は「方言の旅」ということでビデオ作品を作りました。「方言の旅」は、いろいろな意味で我々は受け取ることができるかなと思います。この題名を決めるのも、研究所の中でこの作品を作成するための委員会を作って、ああでもない、こうでもないと話して、まとまった題名が「方言の旅」だったのです。考えてみると、いくつかの意味が考えられる言葉だとも感じています。一つは、先ほどの「つらら」のいろいろな母型が、中央から離れて北へ、また南へ、だんだん移り伝わっていくわけです。これも考えてみれば、方言が皆さんに、人から人へ伝わって旅をしていくことでもあるわけです。それから当然のことながら、今回の橘美子が方言を探して旅をしたことも方言の旅であるわけです。橘美子もそうですし、私自身もそうですが、佐藤亮一先生も庄内の御出身ではありませんから、ある意味、恐らく方言の旅をしているわけです。よそ者がここに来て、話を聞いて、すぐに分かることは、なかなか難しい。方言を研究してフィールドワークしている人間はみんな、これは実際に感じていることかと思います。実際、我々はここにロケでは1週間滞在したわけですが、1週間いたからといって、この言葉が全部分かるとは到底思えません。やはり、分からないだろうと思います。本当にここに住み着くぐらいの心持ち、心づもりでないと、方言の旅は本当に深まった旅にならないのじゃないかと思っています。また同時に、いろいろ深まってくると、知らなくてもいいことまで知ってしまうこともあるかもしれませんが、そこまで本当に分からないと、方言の旅は終わらないのかもしれない。そんなことを感じながら、今回、作品を作り上映し、

もう一度、上映される作品を自分でも見直しました。皆さん、本当に今日はありがとうございました。さらに登壇している皆さんから何か追加して、こういうことを言いたいということがありましたら、いかがでしょうか。

佐藤(亮一) 私は、このビデオを観て感じたのは、佐藤武夫さんの自然な演技というか、本当に自然ですね。佐藤武夫さんは最初の東京女子大学のシーンだけ標準語で、あとは全部方言です。東京女子大学の私の研究室のシーンで武夫さんが話している言葉は、ちょっと緊張というか、やや不自然です。ところが方言になると本当に自然です。つまりふだん方言で生活していらっしゃる方は、方言でないと自然な話し方はなかなかできないことを、私は強く感じました。武夫さんも東京女子大学にいらっしゃっても、あのような標準語をお使いになるわけではありません。私と話すときは、もっと方言混じりでお話なさるのですが、あのシーンはシナリオに、書いてあった台詞だったのです。だから不自然になったのです。やはり私たちは方言を使わないと打ち解けた自然な会話ができないのです。方言とはそういうものかなと思いました。

大西 どうもありがとうございました。時間のほうが、もう予定の時刻を過ぎていますので、この辺で終わりにしたいと思います。皆さん、今日はどうもありがとうございました。また機会がありましたら、こういう会を催すと同時に、また私も庄内のほうに続けてできるだけ来てみたいなと感じています。恐らく、それは登壇しているみんなが感じていることじゃないかと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会 以上をもちまして第20回「ことば」フォーラムを終了させていただきます。皆様、お帰りの前にぜひ御協力いただきたいことが一つあります。先ほどアンケートをお願いいたしました。ピンク色のアンケート用紙は、「ことば」ビデオに関してのアンケートです。もう1枚アンケート用紙がございます。この薄いクリーム色のアンケート用紙です。これは今回の「ことば」フォーラム全体についての御意見をお伺いしたいということで準備していますので、ぜひこれにも御協力いただきたいと思います。今日、2時間という時間が、あっという間に過ぎました。皆様の御参加・御協力のおかげで、無事に2時間を過ごすことができました。少しでも楽しく有意義な時間がお過しいただけたなら幸いです。今日は本当にありがとうございました。

<終了>